

曲亭主人著 第二編五冊

# 青砥藤網模稜案

葛飾北齋畫 平林堂梓

尼曰夷狄之有君不如諸夏之亡也余於胡元信之恭以

天朝中葉由唐律弘仁格序云

文武天皇大寶元年贈大政大臣正一位

藤原朝臣不比等奉勅撰律六卷令十

一卷

元正天皇養老二年不比等復奉勅撰

律令各為十卷今行于世者即其已世

律既已亡而殘珪罕傳焉且其定刑也僅

六七

五等曰笞曰杖曰徒曰流曰死流罪以下  
減一等惟犯八虐者死罪不得上議流罪  
不得減云可謂勝殘去殺黎元在春育之  
中矣雖然明法之學已廢律令之義難窺  
吁古之聽訟者求所以生之不得其所以  
生之乃刑之君必與衆共焉是以天下無  
冤民無冤民則氣和聲和而天地之和應  
矣老氏曰司殺者是大匠斲之代斲者希  
有不傷其手矣大匠天誅也若

神武誅長髓彦日本武誅梟師武內誅甘  
內廐戶誅守屋鎌足誅鞍作殷湯誅尹諧  
文王誅潘正周公誅管蔡太公誅華士管  
仲誅付里乙孔子誅少正卯凡此七聖四  
賢異邦異世而同誅代天行殺而罔愆後  
世刑名刻剝士好斲竟不成雖傷不曉拙  
悲哉余曩做桂萬榮棠陰比事假托言於  
青砥讞獄輯錄釋冤辨誣擿姦發伏千般  
萬般之態命之曰摸稜案原是雖燈下戲

莫法...

墨矣聊可以別情狀之正譌資里老之晤  
 譚今茲後集刻成日書賈復請冠言於是  
 編卽述此事以爲序云

皆

文化九年壬申夏六月二十五日書于飯  
 台著作堂南牕翠竹深處

簞笠隱居



後集姓氏略目

蚕屋善吉	松山與三	苧環白九郎	渡鳥保二郎
森村秋五郎	井輕元二	多賀郡司	白眉長
上臺馮司	上臺圓九郎	苧環鶴太郎	岩平
孤子蘇乃松	甲腰寸白	斡平	遊女空輝
才女阿六	老婆遲也	遙婦阿丑	
寸白妻堂			
青砥藤綱	五十子七郎	淡羽十郎	
員外姓氏			
佐々木満信	蚕屋善三	慈母老樹	寶田鼠齋

姓氏略目畢

處事但憑  
三尺法  
臨民渾是  
一團春  
かほよへ死  
袖こそ  
世の中乃  
さむけ死  
民の  
冬は  
よれ

青砥藤桐



舞鳶鏡  
匣杖殘  
黛睡鴨  
香爐換  
夕薰

かほよへ死  
袖こそ  
世の中乃  
さむけ死  
民の  
冬は  
よれ

関札



化粧坂風流  
蕨屋遊君  
空輝

光棍鴉太郎

高月乃紫乃格の



尚姫阿五

上臺昌九郎

上臺昌九郎

# 玉座



二階堂の家臣  
井怪



常平

常平

草小石  
草小石  
草小石

趣の格



應瑞卿書  
成群智履情何厚  
意甚堅

阿五乃母逢也

白眉乃

松山

木曾の孝女  
森村乃六

近江三洲の孝子  
蚕屋善吉



千年同の



青磁の股  
浅羽十郎

烏丸大王



抹薬堀寸白



青磁の股  
五平子七

摸稜案後集總目錄

第一 二丈川

第二 二丈川中

第三 二丈川下本

第四 二丈川下末

第五 二丈川拾遺

第六 千年洞

第七 千年洞下

通計七段全本五卷目錄果

この段を蚕屋善吉及遲也と云ふは、  
等が人とありを法をくふのふけへの業の心

此段を孝子孝女乃奇耦并一と云ふは、  
柳の権輿森村和入郎が家難をくわへて

この段を化狂坂の妓院風流藝妓を棲上り  
光兼并小野上の宿才女善吉と救入奉をのふ

此段を妙女まのあつり以好夫淫婦をあつり  
并小蚕屋上臺が深松地をめぐりしをのふ

この段を吉寛狂小傳りて自刃願ふ處と云ふ  
藤綱湖東を巡歴して獄を折ると云ふ

此段を陣平屋平等伯父の遺跡と云ふ  
五十子七郎夜妖怪と對るるをのふ

この段を寸向が孤忠天のたをけをぬるを  
并よみみしこそその松文よ家と奥をく火のふ

青砥藤綱摸稜案後集卷之一

東都 曲亭馬琴編述

二夫川 二丈牛打村の名を遺と奉

近江國番場醒井の向る。二丈川のほとり小蚕屋善吉といふのあり

けやまの如久れ。門松杉水樋口と相向い川の巷小横り二條三條は流る。

現やげふゆく水のほれれ舊の水ふて。志るも舊のあまわは凡生と活

りの孰う生死の海を脱せん鶴龜のうがれ齡も千年といふ限りあり壯る

ものをゆるる。老ふ詐り栄枯の際を遁せん優量華の春枯も閑ハ又盛と死

あり。親とんハ夢の世覺ての後ハ悔ハ必也。柳この善吉が人とありをぬる

祖又樂善がとれやで田園夥りくる。寂いと豊けさりのありしハ又善吉と死

至りて早損水損打つて。父祖相傳の田園の残りまをけなく失ひつゝあは





塌して養ひくが遊也が飲ひりばまゝ阿丑もたゞめ安堵しり。  
 現親あざん孝の盡が死のあふり状日ろくて逐電し北年麻  
 ゆへ志まは祓バその面影もまふあぬ姨を索移て家におまひ孝を  
 むらぶるの世は掃まづさ仕度ありとてあるもあぬ由を言ふは  
 遅也の善吉が志の移ぬ為あぬ女見阿丑を妻いとよあくとあ  
 るひくをさうく面うあも言えまじ又人まは相譚てまのそ  
 彼とりまとの従才ぞらむくやで姨の宣のそ推辞べまあ  
 善吉遂は強ひるが遊也のあふり飲ひて負死家の公をよ  
 日とるの二枚屏風のまひく。あとの麻のこのあんと。郷  
 おふ妹とせごの射贈は小半合酒のあふり。よろづよとや  
 時は言言北四家阿丑のその年三かろあて空止も醜め

あまバ陽執あり。善吉のたゞめ。美婦を獲りて人又これと  
 らどよ年来いと疎遠ありり。村長上臺憑司ごまが二子  
 清来て婿姻のまびと述まはるる。下めは異なる。ね  
 致と所があふり。幸とゆりりの遊也あり。原この  
 老女の格あぬ農家芋環某甲が長女あり。女同胞ありけ  
 老樹の二まの農家蚕屋の善吉が妻とありて善吉を生ぬ  
 遊也あぬ壻を招て家と嗣せんとよ。渠極める。淫婦  
 吏と追ひ出て父母の志は稱のま二親ありりて後みづ  
 り不破高戸を引入きて良人と。男見を奉つ。まを  
 へり。めて女壻向九郎の酒と標蒲ふ牙上を打顔。合  
 こそ祝よむとこ有一日多賀の名は奉へり。あて。番場

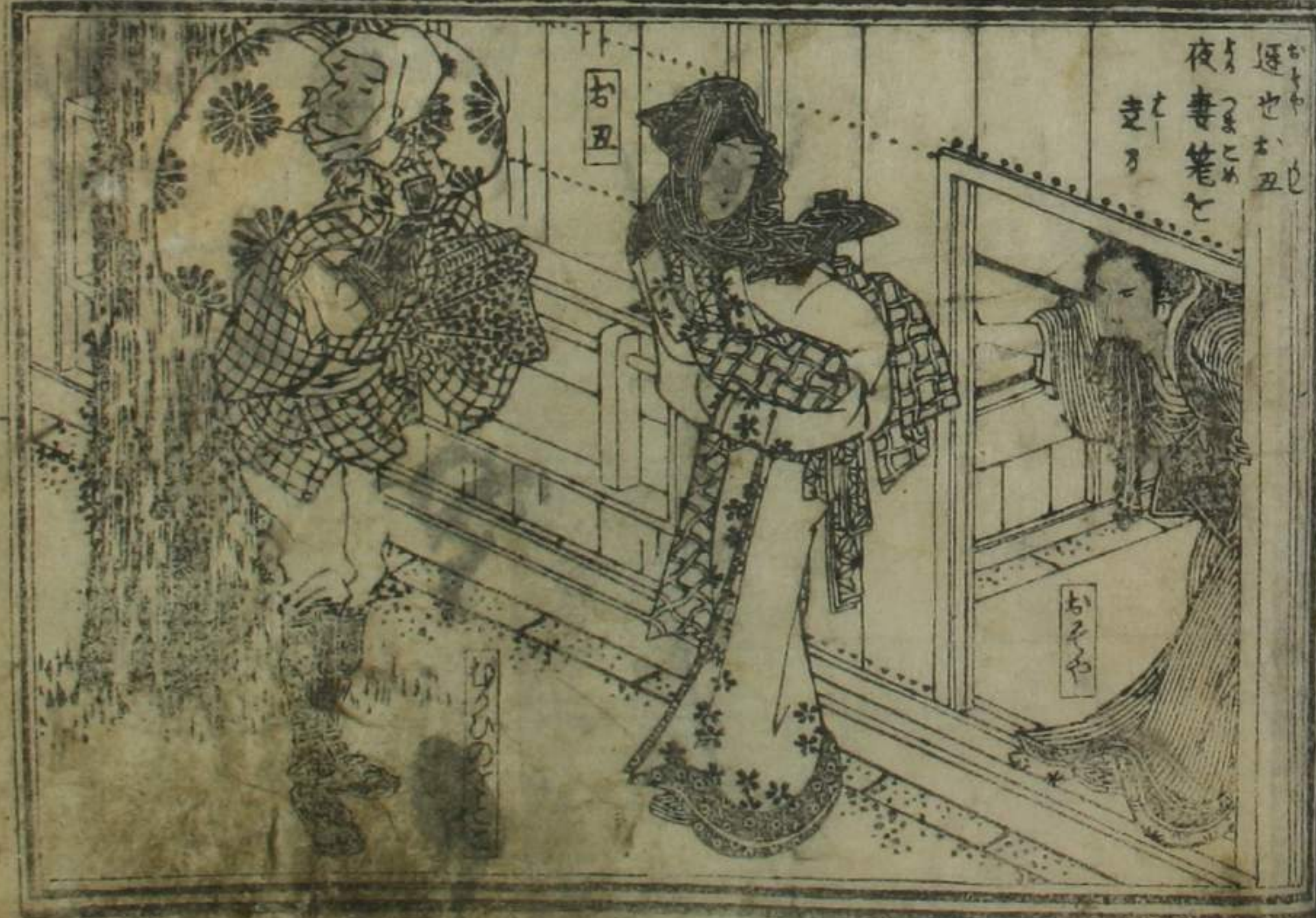
あて頓死とんじとり。されば相傳あひたつの田園も。年々賭突とらは失せて。枯野かしのと成る  
梅子うめこと養やしなは夜更よらるくうりにとれど。地方とくちは舊ふるに農家いんげもれば。あつても  
あつても。門かどの松まつも操みさかと死しむ。その年の後ごりけん。送おくせのさるる。た子たこ  
捨すては。名なの保たも二に郎らうと。いひ。密みつまは誘いざなひ。逐おつて。往い方はと。あつて。せむ。  
蹟あと小こ強つよる。五ご采さいの男をとこ見み。うて。や。ね。務む太た郎らう。二にまの姨あやめ夫む蚕かい屋やの善ぜん三さん小こ  
養やしな。是こゝろ年とし才さいハはる。り。比ひ善ぜん三さん夫ふ婦ふ相あひ傳たつ。て。美み濃のうの赤あか阪はん。商あやひ賈ぎや  
某たがひこが小こ厨ちゆうと。な。ら。あ。よ。五ご六ろく年ねんと。送おくり。り。あ。う。ね。務む太た郎らう。ハ。又またあ。や  
肖かけん母ははあ。や。肖かけん。年とし才さいハはる。り。け。り。奸かん智ち。又また園うゑ。て。竊ぬす癖くせ。さ。あ。り。り。ら。ん。が。  
主人あにも。や。や。く。ま。ま。と。知し覚かく。て。い。う。い。ひ。懲こ。じ。ら。あ。ど。と。ふ。ふ。か。う。あ。つ。て。ハ。  
未まお。何なにつ。ら。ほ。と。あ。ひ。ら。ん。その。瞋ちん昏こん。小こ臂うで。近ちか。る。る。金かね五ご六ろく兩りやう。盜ぬす。ま。う。り。て。往い方はも。  
ま。ま。ど。あ。り。ら。ん。主人あにハ。ま。ま。と。く。怒いか。れ。堪たむ。か。て。二にま。へ。車くるまの。籠かご。と。吐は。き。ま。う。

それハ善ぜん三さん太た郎らう婦ふら。う。怒いか。れ。彼か此こと。索もと。あ。れ。ど。も。その。教おし。と。ご。ふ。ま。う。は。  
る。十二じふにの。重おも。い。あ。ぶ。さ。と。う。ら。と。て。姨あやめ。と。う。も。ん。て。古ふる紙し卷まき。や。や。ふ。彼か合あを。  
瞋ちん。ひ。て。主人あにハ。勸すす。解かい。せ。よ。あ。れ。り。の。と。あ。ひ。絶た。て。の。ら。く。く。ま。や。の。索もと。ご。り。ら。ん。去い。行く。は。  
務む太た郎らうが。母はは送おく。せ。ハ。曩むかし。は。保たも二に郎らう。小こ誘いざなひ。を。岐ま。嶺ね。路ぢ。と。投な。げ。て。ま。り。つ。信しん。濃のう。小こ  
近ちか。さ。み。の。と。あ。ら。や。藩はん。令れい。の。驛えき。路ぢ。と。と。この。由よし。縁ゆかり。あ。れ。ば。足あし。を。駐とど。め。あ。あ。て  
保たも二に郎らうと。夫む。婦ふ。小こ。う。り。て。女むすめ。子こ。を。生う。ま。え。と。阿あ。丑うし。と。名な。づ。け。つ。い。も。ま。あ。れ  
世よ。と。い。ひ。て。十じふ。年ねん。あ。ま。り。送おく。り。せ。よ。有あ。り。一いつ。年ねん。の。春はる。保たも二に郎らう。ハ。時とき。度ど。を。去い。行く。は。  
僅わずか。小こ。二に。日にち。あ。り。て。か。て。む。れ。り。ら。し。く。は。送おく。せ。ハ。ま。ま。と。く。園うゑ。ト。果は。て。妻つま。を。あ。ら。う。  
客きやく。店てん。森もり。村むら。和わ。五ご。郎らう。が。炊く。妻つま。と。あ。り。て。親おや。子こ。の。死し。とも。彼か。知し。ま。と。と。四よ。年ねん。  
あ。び。て。和わ。五ご。郎らう。が。妻つま。を。ま。り。け。り。家いへ。の。僅わずか。は。五ご。才さい。あ。り。女むすめ。見み。ひ。ら。り。あ。り。ら。  
去い。り。の。日ひ。小こ。疎そ。一いつ。和わ。五ご。郎らう。ハ。鰥あづま。と。ま。う。ひ。の。宿しゆく。寝ね。と。み。し。隨したが。は。送おく。せ。り。

卧席ふしどのおげおぼろしにて果はたを種たねに女むすめ見みふ由よし母ははいと噂うわささるがぞ延のびせも  
 あふやうなる客きやく店てんの妻つまふありて女むすめ見み阿あ丑うしの牙はをひらく人ひともなる  
 春はる秋あきを送おくつ又また七八年しちへんとるを移うつす和わ五ご郎らうが活あつ業ぎふ年ねん衰おとろてぶつので  
 ちりか小こ任にんせむ大おほなる家いえのありて小こ任にん荒あしへははくろひがきて宿やど借か  
 旅たび定じやう宿しゆく稀まれふありてかいてあふまゝのこをりとほして延のびせの今いまもいひ  
 がいさくふりのりて女むすめ見み阿あ丑うしのこぶらうありて容ゆる止ども人ひともふは指さしさう。  
 是これと人の側わき室むろ妻つまもまゝなりともづが身みひとりて老お乐らくまゝさうがらひやさういん  
 かる知ちは虚うつをさるる金かねの中な小こ任にんが魚いさな刺さの上うへ菓かをつら熱あつよりなる身み畏おそ  
 る。とぞどの元もと及およふんせむ。密ひそに阿あ丑うしと合あひて。秀は小こ水みづもぐるとる小こ折をり  
 京きやうなる坊ぼう費ひの主ぬし官くわんありりの年としに小こ東とう園えんへ赴むかひ。和わ五ご郎らうが家いえ定じやう宿しゆく  
 とるありけりかいてけとと阿あ丑うしは懸けん相さうくさうり物ものとせうりるが和わ五ご郎らうが

身上みみ衰おとろて家いえより住すむせむ。小こ任にん捨すてて中な此こ夜よはゆさ  
 一夜ひとよとこよ明あせふ延のびせの忽たちち率りつよひいさへてあふ狐きつね相さう譚だんあぞ件けんのさこ  
 ふうたむまゝがられ延のびせゆつて竊ひそか人を遣つかはさる。不ふ孫そんて物ものよとさのておん身み  
 の後のちともまゝて來こよ東とう山さんのりよりに。よれ家いえを修ありて親おや子こをさうりふ。延のびせ  
 とのりふいと嬉うれしく。車くるまよく駕か合あひ。迎むかひの人ひととせり。夜よ果はたしを彼かのをこ  
 消息しよきあたまふ書かきさめ。竊ひそか人を遣つかはさる。かんとおとれ和わ五ご郎らうへ去こ歳ざい  
 たり。積つ小こ任にん籠かごらきて世よの経けい管くわんもさうありて。世よ帯たいのこたう。女むすめ房ぼうふ  
 のと委あまらふ延のびせの折せごをよけ且かつとて。わがりの良よ人の物ものともいふ。衣い裳せう  
 櫃ひらを傾かげて一ひと獄ごくと。夥おほくあふぬ金かね錢せんさへ悉おほく腰こし小こ著せつ病びやう體たいひつる良よ  
 捐けん年ねん來らい母はははとてとれ。幕まくら小こ前ぜん妻つまの女むすめ見みと菓か迎むかひのよこを先まへ  
 その夜よ阿あ丑うしの海うみともふ。京きやうを投なげてまゝりつ。五ご十じゆ里りと五ご日にちが移うつりあはす。

唐土



近江ある草津の驛に宿るとて聖の宮へ入るととらるる夕。あまひ  
 飛御りて来りて京の事とてこの消息と遠とせしむ。親子眉根を  
 うらほはつ忙しくもいとすまみ小件的主管某丙も年来主の物を探め  
 するの發覺て官の沙汰とらぬかぐて八條で契りしもの。今さる小仇ありてん  
 好も又由とのされ。あらあつと書らるる。近也阿互由されと  
 んて。うらみ撃つて来りて。津小舟と夫の如く。進退とふ突りて。うらみと  
 んで。あまひは且く草津小退苗とて。せめて京の音耗をまら。近も悲  
 やる彼白物の。うらみとらるる。藤と道と小路のけまが。いさか獄屋  
 繋ぎて。あまひもむしくるけ。は。近也阿互由とて。草津へ。あまひと近也阿互由と  
 果て。今さる小妻を。家を恋とて。あまひも。後悔とふら。うらみとあまひと  
 せせんくせんとあまひの。竊せし。衣裳金珠の盤纏小珠あり。いさか。つ利

親子時。疲も。旅寝の。寝られ。病に。日。あまひと。近也阿互由と。
 あまひと。幸く。玉の緒。の繋。ぬき。あまひと。近也阿互由と。
 ひる。苗。より。芽。置と。川。り。夜。の。草。を。績。綿と。繰。り。つ。そ。なく。せ。の。艱。苦。と。て。
 ちやく。口。を。鯛。ひ。つ。一。年。あ。まひ。と。送。り。つ。あ。の。時。よ。ろ。と。送。也。へ。色。と。欲。と。ふ。
 送。ひ。て。ん。筑。摩。の。洞。の。あ。まひ。と。小。造。り。罪。と。お。ひ。ひ。ま。る。邪。慳。の。角。の。お。ま。ら。
 牛。小。等。の。草。野。稼。ぎ。熱。小。人。の。ま。ん。ち。た。る。女。見。の。ら。ら。る。と。う。ら。み。と。近。也。阿。互。由。と。
 の。こ。悔。つ。憑。む。樹。蔭。の。う。ら。み。と。小。た。ら。も。果。へ。和。又。郎。刀。祿。の。増。と。お。ま。ら。と。
 執。念。が。親子。の。う。ら。み。と。魚。屋。で。世。も。も。ん。よ。も。棄。て。世。廿。年。あ。まひ。と。近。也。阿。互。由。と。
 出。し。と。死。は。棺。一。子。の。移。太。郎。へ。い。ふ。ら。り。け。ん。の。惜。れ。と。志。と。ま。り。と。い。は。
 ち。よ。と。い。ち。の。も。過。て。あ。まひ。と。近。也。阿。互。由。と。
 ころ。の。し。近。也。阿。互。由。と。母。の。送。と。化。せ。と。て。三。年。あ。まひ。と。近。也。阿。互。由。と。

彼此と索つ。竟不草津の落野井少。不と後小こまこと環舎阿丑のちも。  
 二まの君は侍ひつて。と真実中ふ養ひつ。元来まよをるにあらねど。  
 赤繩の繋る所竟は脱走がけまの阿丑を妻小まをるる下。叔母室母老樹が  
 今殺まらびて。さるる正しき子を捨るまづは淫奔する。婿の事との  
 いひ送せんの。いふぞとの小原被老樹の婿送也との質りつて。親を慕ひ夫と  
 ろふ親を人のまよは務まらぬ。婿の婿のこゝろめ。妹とさるる縁をあらも  
 根とせど。怪精太郎の怨角より。いとおそしきものありしが。彼がうへのせん  
 ことなる。婿の赤の女流のこゝろ。一日の運ひあて。家を捨ると捨て。密夫と  
 走りもふも。年長てくるも。悔しきをひもつん。おん身をの面影を  
 認るはとも。環舎よりあんな日ふ。よぶる。んえあつ。ともゆもまらへて。  
 故郷の水へ入せし。そまゆるるのむら。汝が家は養ひつて。一朝を

する。まおせせよ。とらうりて。口が奴の父の妻女あてとせ。く。その恨と  
 改め。故郷ちう。身をりつ。墓所の夏草刈拂ひ。香華をひ向ひ  
 る。二親の怒も解いと。執りく。おひのらん。おのの母をわりの  
 嬢のこと外あせせ。といひ遺せ。言の繋をまが。ゆま。と。年が間を  
 掲して。遠く返也。環舎より。善吉が孝順。この。ぬりて。おひま。ま  
 善吉の年。来嬢が身を。捨て。在けん。く。阿間も極め。昔のま。あつ。も。  
 有母志。ぬち。して。柳も。その。罪を。い。ま。つ。ん。か。男。思。ふ。さ。り。奉。は。二。郎。大。  
 外戚の。苧。環。氏。を。肩。ら。せて。亡。母。の。志。を。果。さん。と。の。ま。ひ。た。つ。る。後。ま。  
 村長上。其。室。馮。司。が。物。う。ら。り。あ。て。往。ま。り。が。子。彌。太郎。が。主。の。金。を。盛。て。  
 その。債。と。残。夫。あ。る。善。三。は。肩。つ。つ。今。う。は。性。方。も。あ。ま。ま。る。は。と。た。め。  
 い。つ。終。つ。れ。且。羞。て。ひ。ひ。と。改。め。善。吉。を。慈。愛。と。女。見。阿。丑。は。異。る。る。終。る。

さきか小親渡けし信濃の妻卷の客宿五郎がうのふしを受く  
遂に宿が継室となり七八年とるを種小郎その家の衰へて  
邪念を度ら病臥する良人と捨希妻の女見を捨て阿又り  
投てきりしうとを善吉小告もあふせと元来二夫と妻を  
舟餘里と隔らん人絶てあうけりさてまじやでい過去  
物ゆりはて善吉阿又がうとて再て洋よ説のうといひ  
見まぐさでうの條さうの或まば後戻不敵ある人

二夫川の中

却説善吉の聞し小の祖と姨遅也かいと老実るまばあうく  
おの生活は懈るまなく一年あまう選りつげくといふ  
救世連綿と由緒正しく祖父のまじやでい村長と奉り  
まじやでい村長と奉りまじやでい村長と奉り

志うる小父あそとせしがいとつりめりしと家勢衰へ田園大々  
刻従才上臺氏村長と推奪ま今將水も飲あて月祭日祭の園生  
小の豪家の庭子小まうあうめれ人の為小履を成るま又世  
勢いづふともとるはまどめく先祖と辱るまといと朽とく  
年十六の比りしてゆきび家と貞さんそ志とま途も移まば三伏の  
暑日自由又玄冬の寒死夜も牛馬小あうくやとるう人あ  
拵すよけまど母の病あて六年七年の菓餌三味歌あ  
みと物の雜費と厭つ種へ瘦田二頃の主あもなるま母公  
てへ又嬖はあが祥とるりて妻とある身とるりぬ小  
桎梏と被られて貪たうよあうく何れも年未の志と果  
今より深倉へ赴き五六年中拵するまそれらどの事







近江の落野井よ  
善吉 姨よめ



善吉

あまのついで  
あまのついで  
あまのついで  
あまのついで  
あまのついで



おさか

おしち

妻籠の駅よ  
お六 行客と  
引く



お六

あまのついで  
あまのついで  
あまのついで  
あまのついで  
あまのついで



せぬ妹と使が。こまよつれて山鷄の尾上の月と本やぐる返のれ目送  
 人由る。時は建治三年秋九月十日のまうれとあるふ吉の只ひとり里  
 遠離る小篠原のけやく家のものこそ濡じ家を牛より。第百と  
 りの曠昏は故烟の妻先ややまより。那須澤をさうててを宿りめあ  
 たることひて歩の運びをいそがせども。秋の月るんが寝て。たやまの  
 よう暗くありつ。阿計呂の山の山夾より。十三日の月圓は升りて。志のふ  
 餘る志の芒うら枯きを後。虫の声。笑くふつひんまよつり。歌うまぬ身ハ  
 るくく心。こころ慰よももの。かのが表へと森はゆる鳥よごも後まろく。  
 暮て宿るの独り。お領うま忙しく。只管ふきる夜よ。さる全に右  
 なる小松の下。見くと老るりのあり。立ちうごまは。さるうせが。かろくと  
 立音するは。やりのもさる。だん。お取て。月。翳く。さる。と。ん。れ。ハ。珠。瑠。の。櫛。の

いとぬり。こころあて。齒ハ。ニッ。四ッ。缺。り。道。遺。る。火。拾。ん。こ。ろ。稼。ま  
 所為るが。ら。ま。の。わ。り。る。山。妻。ホ。が。挿。る。ん。べ。き。物。あ。の。あ。だ。これ。も  
 又世の貧るる。小野駒の蹄は踏碎うせん。可惜。いとふて。と。と。を  
 さ。さ。か。に。ん。捨。か。り。て。懐。不。接。つ。又。二。三。町。ゆ。く。夜。一。里。塚。の。母。と。り。う。  
 喃。旅。客。ふ。ま。下。り。前。の。人。煙。る。暮。果。て。は。る。の。紙。何。知。さ。で。ぬ。た。を。ま。  
 病。け。と。ん。と。呼。び。う。け。て。遠。く。ま。り。来。つ。背。後。より。引。く。袂。と。あり。由  
 拂。び。と。ん。う。ま。六。年。十。三。四。の。少。女。と。こ。め。が。つ。ら。る。宿。り。よ。ま。の。ま。の  
 い。そ。が。旅。よ。あ。ら。ね。ど。こ。の。の。慣。れ。の。ま。の。勅。心。は。路。を。貪。り。宿。さ。り。あ。れ。て  
 い。と。使。る。お。ん。身。が。宿。所。の。い。づ。ま。の。夜。ぞ。飯。あ。さ。ら。ほ。て。食。風。る。れ。蒲。團。と  
 貸。さ。る。お。ろ。ろ。つ。ら。ひ。と。回。答。つ。う。ち。笑。へ。打。笑。ひ。そ。の。宣。ふ。や。で。も。け。り。は  
 席。薦。の。近。こ。ろ。表。を。う。え。る。座。鋪。の。間。も。け。り。し。こ。ろ。と。誘。ひ。し。の。り。ま。



うよ今赤いさ踏おし戸がいろで舊の如くあしうべまどんあがう  
 ちくしてそと倚けそ置んととんれが生憎は想とあうまど風よあめたて  
 戸の又庭へ撲地と倒れ行燈さよりち滅しう。あんなもさ入る。月の光の  
 幽る。燈火よすすていゆ。あよ又つくと外面をるがむまどを柿のみち。  
 ちらちる随は秋寂てゆれも拂りぬ庭るがら石の並ぶ樹まをたなるべ  
 んゆるさよ哀さるるふ蒸襖のあなよ。いさ咳くへあそ。いと苦いげお  
 嘔く声と。原来の患人あうよこそ。とひとりごらつて足と翹いひ膝する  
 蒸襖の竅より彼外を窺まが。齡五十あまうるるとこ。いさ病體て  
 ありる横よ牙を倚ける。顔色の青やねの骨の黒やうた。白髪  
 まかやの髻生て。長死仇の黄も。項の何とん紫ごらて。此赤くえあめ  
 枕よ搦る痕るべ。おろく疼と吐んとて。唾壺とらん探る腕細りて。その

世の人とあおりのほど。瘦燈のいと暗く。あうはうひるた燈火といふれら  
 えん滅やせん脆まの人の命あて。亦是人のうへあう。と嘆息して密やふ  
 舊の如く坐をとり。彼正しく主人るべ。あまがすの心賊の隠宅あ  
 あまがめり。とさひかして腰は著る。燧袋の口とやた。こののり燈へ  
 火さうらせ。おそそよけま。危瀕のうらう。少女の版をて来つ。苦言が  
 不とうにさ。おた物や。くは。ひらうが。て。炊き付ま。の急ぐと  
 むれど時もうらうぬ。あまうたうべ。ひて。たや。寐や。のめ。といふ物の  
 いひごの愛敬つて。進止ま。伶俐んえ。う。苦言の今さ。う。外の  
 あつれは胸あ。あうら。はう。は。て。箸と。おた。そ。少女よ。い。あ。う。ん。ま。が。思。人の  
 あるた。そ。の。廣。あ。る。家。又。使。る。小。厨。も。あ。る。只。二。人。住。ひ。あ。ん。や。昔。の  
 徐波推量ま。痛く。あ。う。し。患。人。の。あ。ん。牙。が。あ。ま。く。飲。母。の。あ。の。を。た。さ

じや。おん牙の何と嘆まふ。今宵限りの宿るも。主人の名を嘆まふし。  
 と向きて。忽ち酸鼻。鼻中傳へんも。苦なる。昔は。今も。縁を。賤婦の。法。球。  
 まつりの。お。秘。家の。艱。を。匿。あ。む。駟。げ。よ。告。ま。う。さん。の。恥。が。せ。し。ま。ら。ぬ。  
 ろ。から。嚮。ま。つ。の。は。流。敷。れ。か。る。知。は。痛。く。り。と。腹。立。く。お。不。ま。は。其。を。  
 憎。と。て。咎。も。へ。ど。涙。あ。る。言。の。條。は。ち。づ。お。く。袖。の。香。と。の。そ。め。て。て。あ。る。  
 こ。が。う。を。照。白。の。恥。しく。恨。く。又。悲。しく。侍。ま。ど。向。せ。の。は。お。悲。む。ら。  
 る。月。怪。ま。侍。り。て。ん。猜。し。も。ふ。ど。く。彼。知。は。臥。た。る。又。は。侍。り。の。歌。の。う。ら。  
 多く。も。あ。る。ぬ。客。店。小。侍。ま。ど。も。つ。の。の。と。け。る。り。し。て。ろ。母。を。長。ま。  
 病。著。み。て。ま。ど。より。家。の。艱。と。あ。り。さ。み。く。小。を。竭。せ。減。茶。茶。餅。の。  
 効。る。く。黄。泉。の。客。と。あ。り。ぬ。い。ぬ。び。下。り。て。活。業。衰。へ。今。茲。の。去。業。の。  
 恋。了。た。ま。ま。り。の。も。で。ん。が。下。男。下。女。大。々。の。牙。の。暇。と。ま。し。て。か。中。小。

ま。実。ある。専。と。あ。げ。て。後。妻。と。つ。の。の。を。子。せ。す。年。年。来。を。終。は。け。れ。  
 衰。ゆく。活。業。の。の。母。年。ま。お。と。ろ。て。こ。ろ。死。た。れ。あ。の。つ。ろ。死。ま。の。ま。う。ち。も。  
 累。る。の。の。こ。う。四。年。前。の。の。八。月。の。下。旬。より。假。漆。より。ち。臥。する。又。の。病。著。  
 お。こ。ろ。果。ど。人。の。の。病。は。秋。風。の。た。つ。り。る。れ。枯。ま。て。ゆく。穗。屋。の。芒。も。振。よ。  
 か。ひ。る。死。継。母。の。鬼。と。て。七。八。年。遠。く。た。家。政。うち。任。する。夫。の。痛。著。を。  
 え。ん。と。も。せ。ど。あ。ぶ。き。の。の。水。撥。攪。ひ。一。夕。潛。め。ふ。背。門。より。ま。り。出。り。  
 三。年。の。け。の。中。で。往。方。志。ま。ど。母。の。實。の。女。見。あり。其。を。圖。り。て。老。来。ま。つ。  
 世。絶。んと。て。逐。電。せ。一。秋。怨。を。仇。る。る。狗。自。物。彼。憎。む。下。後。し。と。臥。つ。罵。り。  
 又。の。怒。を。實。ん。よ。も。は。は。ん。り。り。り。の。形。る。と。昔。庇。を。稟。する。  
 の。の。も。ん。か。と。て。より。つ。り。ぶ。と。牙。ま。ち。り。死。親。族。る。け。は。何。う。さ。り。ん。も。  
 病。む。死。と。年。も。定。ま。ぬ。日。の。の。も。曠。昏。毎。日。振。け。ど。も。ん。く。り。も。せ。ぬ。



妻笥の  
客店よ  
孝子孝女と  
憐む

善吉

莫凌なき及集長一

七三



お六

お六



旅客が久米路の橋の渡り難い世は控られ、親子ごころの  
よるるに去る年の山洪あふ母屋の腰を洗きて荒らるるは荒らるる宿  
客店の名のまふと宿する人の絶てゆるせんをさふ驛稍盡れへ立  
ゆて人の袖を引つひあらし稀は誘引ふ房狭し親の命を繋ぐの  
茶價の絶果て佛の利益神の加護あされゆあふ祈まども罪いと深き  
虚言の牙の為小せぬ活計を明白小告侍り、拜もと面あげ小使ま  
袂を押當て拭ふ涙のむら雨にあとより晴るよもほ「吾吉ハ縁由を  
つくと啖て嘆息し。世間不幸なりののりまひとりふあふさるる肩  
繼釋ぬ少女子が孝の等向るる縁づて四幸小乃ぶまの大病らふ  
までさるもさあこれぐちで誠ある人を皇天のゆる憐れん今こそ  
あれ之後の必業のひつらん。おん牙がころ慰む為よ一對の物がころあり。

これ近江の二ま川の舟よりふて吾吉と呼るもの之祖父の  
ちでハ有得の農家ありしと受けども父のとれより衰微してつが二親の  
世となくし助る親族ごまのけまご。今での水も飲あむ親る死後の  
孝のの家を與とよまくと志を激せども、獲がこれのの世の貨  
故御ありとも村落あて。成ぶるもあふせんが鎌倉へ赴きて五六年の  
掙するべ不意福にあふののわんうとて、姨女房と家も由縁由  
あふだんもあふぬ。東の盡知へ投てゆく。旅の衣の妻を袖あつあのを  
一樹の蔭葉末乃雪下牙ふうけて憂事のものごとを送し。積まの損  
ゆる客もあふも。弟命さるれおん牙は比まのこれ幸小男子と生も  
進退も又自在に。室よおん牙が公るそよ。推量まのいと痛し。これり  
富りののりせ。や路費の半をわけても。その孝のを賞まふまふ。

途遙るる旅路なる懐は物程けしむ。さかしのこめて意は任せど何ぞ  
と小頸を傾け。ひとり点次懐中より。嚮小拾一玳瑁のありしを  
さう出。さる物少のあはれども。賣ぶ此の浅ふるをば。あまをりて  
まきの口腹は稱んかの必進じ。福どりのひつ件の櫛を遣よ。少女の  
かどく掌は受て。仍燈よさし。はして。さんかうんてうら。整た奇やこれの  
嚮小くはが途小遺せ。母の記念の櫛小けり。物太く。賣場はけりしり。  
この亡母の記念あり。せめての産育の恩徳を生。涯頭小戴ん。こめて小雲  
時も身とをねさだ。まろも小嚮小驛々。知より。おん身を誘引さる。あう  
る。涙を擗る小櫛のあり。この物地めて。迷いけん。去り去て。索んりのと  
公類小焦燥とも。旅客は宿し。付さ。それ中頭小のる。稱ん。天明が  
人よとされるん。死す。たとまてけり。と百遍悔千遍悔の。今う將小

侍りし。あはれ何処めて拾ひ。ひ。死す所の賜あり。と数回うら。い。て  
飲び。気色小見ま。了。吉吉。て小膝を拍。え。が。て。り。は。嚮小箇様  
箇様の。小松の下。小の櫛のあり。入て。道路は。遠る。と拾ん。か。様。り。ゆ  
る。から。まの。わ。り。ある。山妻。亦が。拵。る。は。さ。り。の。る。度。と。あ。へ。流。石。よ  
ん。捨。が。て。懐。小。扱。つ。こ。人。来。て。今。昔。の。憂。物。が。う。と。を。け。く。ふ。分。ま。て。  
その。う。と。ん。や。忘。ま。か。おん。身。か。至。孝。を。感。佩。し。物。も。が。け。と。懐。より。  
探。し。て。まの。櫛。の。主。とも。あ。く。を。返。せ。ん。亦。是。おん。身。が。亡。母。の。小。雲。時。も  
忘。ま。ぬ。孝。を。皇。天。の。か。ま。と。齋。して。げ。ん。を。り。て。返。さ。し。も。ん。歎。され。も。又  
奇。る。り。妙。あり。彼。と。ん。ま。ま。と。あ。く。も。雲。よ。おん。身。の。世。間。は。有。が。う。と。ま。ま。  
孝。女。る。れ。これ。涙。愈。り。ゆ。り。の。度。を。再。會。す。目。の。あり。り。や。せん。口。を。は。き。ち  
さ。ん。の。迷。憾。し。何。と。か。呼。ま。る。ら。ん。と。同。して。せ。と。額。を。拵。実。の。六。と。り。し

孝女るれこれ涙愈りゆりの度を再會す目

額を拵実の六とりし

後ほど。後の母小携子あり。其を嫉妬せしむ。常女と侮れり。  
とつて善吉巻と持り。かましく憎む。其後継母親子あり。生さぬ  
女児の孝ゆふ自とも羞む。物推奪ひ。一旦牙をば殺すとも。かくさへ  
嗚呼のりのるれば。未の心を榮へべき。夫雷不怒。まじく猛獸不  
啖。まゝん。それが終りを。目もあつた。快事あるゆゑ。いふ言ふよき。  
壯夫が姨女房のうへを。肩張じつ罵れ。阿六の頻も嗟嘆しつ。  
さおのつるべき。さおのつら。又あつた。不義の妻あれど。つらつら。為す  
稚きより。字まじく恩深し。むつと出まひし。と恨し。よきとも。  
憎し。とらひ。むむむ。さおのつら。世より。罪障重き。つらつら。が  
うと。ひとり。むむむ。つらつら。脚つのも。彼も母と戀し。人の善悪。善人  
物存り。人あり。むむむ。むむむ。と信じて。むむむ。善人の感涙。むむむ。

禁あむ。是彼の物か。うふ。夜も長月の新深で。寐らむ。の撞を  
音する。おし。もあれ。あつた。和又。むむむ。と咳き。よ阿六と  
よ。声のいと。苦む。むむむ。少女の志。よ。驚され。遠く。むむむ。  
起し。去。目。薄く。垢。漆。る。房。固。り。来。て。善吉。が。臥。房。を  
破。す。その。牙。へ。又。の。枕。方。不。臥。し。ん。ど。も。い。く。度。り。起。て。又。抱。き。さ。る。夜。不  
善吉。の。少女。が。公。標。を。撲。賞。し。且。親。子。が。房。命。と。あ。つ。た。と。あ。り。あ。よ。  
この。秋。ま。只。こ。ま。か。為。小。悲。し。い。添。に。似。し。り。更。團。々。や。夜。床。さ。む  
け。く。あ。る。む。む。む。嘔。く。声。さ。耳。よ。つ。つ。く。通。宵。の。も。移。り。し。は。  
朝。が。ら。の。飯。炊。せん。も。む。む。む。所。り。る。れ。ば。ま。ま。天。の。あ。る。れ。れ。ど。少女。と  
む。む。む。学。ん。て。沙。次。を。い。そ。ぐ。と。傷。り。て。飯。を。食。む。定。か。る。核。兎。の。外。小  
法。二。婚。と。せ。ん。と。さ。る。ふ。お。お。と。固。辞。て。絶。て。受。む。せん。と。さ。る。と。お。

七二

伴の法と竊小臥單の下に推入して送る。辞別して去る。又  
中。秋の今おん月が志を移さるる。思ひもや。町噂も又  
看病も。春方。向て温暖る。おとりのもの。由の。思ひ  
あふ。亦も。ひる。恙。と。信。草鞋。先  
登。外。面。へ。お。早。飯。由。め。け。く。極。く  
た。ま。る。紙。勸。解。つ。も。指。燭。と。端。ち。り。く。目。送。ぬ。畢。竟。の。孝。子。孝。女  
再。會。の。時。あ。り。や。な。し。や。そ。の。次。の。卷。小。解。り。る。紙。入。て。ま。る。ん。

青砥藤綱撰後集卷之一終

青砥後集卷之五册内

新寫内

